

第5章 在宅タイムスタディ対象高齢者の属性 - 第一次モデル事業認

定調査対象高齢者との比較より -

調査は、全国から抽出された 26 都道府県で実施され、調査対象者の選定にあたっては、一次判定結果における要介護度、および認知症高齢者自立度と日常生活自立度の組み合わせを参考に特定の状態像の高齢者群に偏らないよう配慮を依頼した。また、本調査の対象は、調査期間中に、入院や入所（ショートステイを含む）しない高齢者する予定がない高齢者とした。

このような条件のもとで在宅タイムスタディ調査の対象として抽出された高齢者がどのような特徴をもっていたのかを明らかにするために、要介護認定を受けた全国の在宅で生活している高齢者群との比較を行った。

比較に用いたデータは、平成 21 年度以降の要介護認定の円滑な導入に資することを目的として平成 20 年 12 月に行われた要介護認定モデル事業（第一次）のデータである。このモデル事業で収集されたデータは、各都道府県の推薦を得た 129 市町村における平成 19 年 12 月中に要介護認定及び要支援認定の申請を行った者 34,401 名分のデータであった。

分析に際して、これらのデータから認定調査時点において、在宅で介護を受けていた 27,605 名のデータを抽出した。この集団は、要介護認定データベースからランダムにサンプリングされていることから、わが国の要介護高齢者の標準的な状態を示しているものと考えられる。

これらの集団と本研究の在宅のタイムスタディ調査の対象となった高齢者群と比較を実施し、本研究の対象となった集団の特徴を示した。

1. 性別

在宅タイムスタディ調査対象群は、男性が 36.5%、女性 63.5%であった。一方、モデル事業対象群は、男性 31.7%、女性 68.3%で在宅タイムスタディ調査対象群の方が男性の割合が有意に高かった。

表 5-1 調査対象者の性別

	在宅タイムスタディ		モデル事業		P 値
	N	%	N	%	
男性	180	36.5	8,757	31.7	*
女性	313	63.5	18,848	68.3	-
合計	493	100.0	27,605	100.0	

*P<0.05

2. 年齢

(1) 平均年齢

平均年齢は、在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群は、81.5歳（標準偏差 9.76）であった。最小は44歳、最大は100歳であった。一方、モデル事業の調査対象群は、平均78.8歳（標準偏差 8.05）であった。最小は55歳、最大は105歳であった。

在宅タイムスタディの調査対象者群の平均年齢は、モデル事業調査対象群よりも統計的に有意に高かった。

表 5-2 平均年齢

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	N	P 値
在宅タイムスタディ	81.5	9.76	44	100	485	**
モデル事業	78.8	8.05	55	105	27,605	

**P<0.01

(2) 年齢階層

年齢階層別には、モデル事業調査の対象となった高齢者群では80~84歳が26.9%と一番多く、次いで85~90歳が20.8%、75~79歳が20.3%であった。

一方、在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群は、90歳以上が22.7%と最も多く、次いで80~84歳が20.2%、75~79歳が18.6%であった。

これらの結果は、モデル事業では90歳以上が12.7%であり、平均年齢と同様に、在宅タイムスタディ調査の対象群は、90歳以上の超高齢者群の割合が顕著に高いことがわかった。

表 5-3 年齢階層別人数

	在宅タイムスタディ		モデル事業	
	N	%	N	%
40~64歳	26	5.4	955	3.5
65~69歳	28	5.8	1400	5.1
70~74歳	44	9.1	2973	10.8
75~79歳	90	18.6	5605	20.3
80~84歳	98	20.2	7436	26.9
85~90歳	89	18.4	5735	20.8
90歳~	110	22.7	3501	12.7
合計	485	100.0	27605	100.0

3. 要介護度

(1) 一次判定の分布

一次判定は、在宅タイムスタディ調査の対象群でデータが存在していたのは、224名であった。この集団の中では、要介護1が25.4%と一番高く、次いで要介護3が21.0%であった。

モデル事業で一番多かったのは、要介護1で45.5%、ついで経過的要介護が22.0%であった。モデル事業において、要介護5は2.8%で、在宅タイムスタディ調査の対象群は21.0%であることから、在宅のタイムスタディ調査を実施した高齢者群は、日本における在宅の要介護高齢者群の中でも、とくに要介護度が高い高齢者群が抽出されていたことが明らかにされた。

表 5-4 一次判定

	在宅タイムスタディ		モデル事業	
	N	%	N	%
非該当	0	0.0	1,241	4.5
経過的要介護	0	0.0	6,075	22.0
要支援1	10	4.5	0	0.0
要支援2	5	2.2	0	0.0
要介護1	57	25.4	12,569	45.5
要介護2	44	19.6	3,567	12.9
要介護3	27	12.1	1,965	7.1
要介護4	34	15.2	1,402	5.1
要介護5	47	21.0	786	2.8
合計	224	100.0	27,605	100.0

(2) 二次判定の分布

二次判定では、モデル事業の高齢者群では要支援2が23.3%、要支援1が19.8%と要支援高齢者が全体の4割以上を占めていた。

しかし、在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群における要支援高齢者は、要支援2が4.9%、要支援1が3.4%と1割にも満たなかった。在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群においては、要介護5が17.2%、また要介護4が17.6%であり、今回のタイムスタディ調査の対象は、要介護度が高い集団であることがわかった。

表 5-5 二次判定

	在宅タイムスタディ		モデル事業	
	N	%	N	%
非該当	0	0.0	354	1.4
要支援1	16	3.4	5,177	19.8
要支援2	23	4.9	6,100	23.3
要介護1	84	17.8	5,711	21.8
要介護2	92	19.5	4,109	15.7
要介護3	92	19.5	2,700	10.3
要介護4	83	17.6	1,390	5.3
要介護5	81	17.2	637	2.4
取消	0	0.0	8	0.0
合計	471	100.0	26,186	100.0

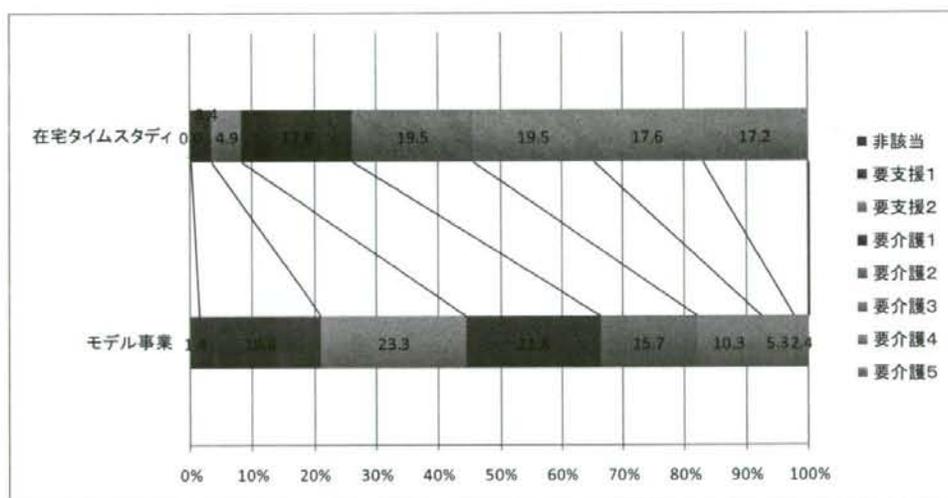


図 5-1 要介護度の分布

(3) 要介護度の変動について

一次判定から、二次判定にかけての要介護度変動については、以下の表 5-6 のようになった。在宅タイムスタディの高齢者群は、「変動なし」が 83.6% を占めており、ほとんどが変動しないという状況であった。モデル事業の群でも、「変動なし」が 48.5% で一番多かったが、その割合は、在宅タイムスタディ調査の群よりも低かった。次いで、「1 段階の下降」が 30.1%、続いて、1 段階上昇が 12.8% であった。

以上のように、在宅タイムスタディの高齢者群においては、一般の要介護高齢者群にお

いては、ほとんどが認定の変更はなかったことがわかった。

表 5-6 1次判定から2次判定での要介護度の変動

	在宅タイムスタディ		モデル事業	
	N	%	N	%
2段階以上上昇	3	1.5	268	1.4
1段階上昇	22	11.3	2,472	12.8
変動なし	163	83.6	9,384	48.5
1段階下降	7	3.6	5,818	30.1
2段階以上下降	0	0.0	1,320	6.8
非該当に変更	0	0.0	71	0.4
合計	195	100.0	19,333	100.0

表 5-7 在宅タイムスタディの要介護度の変動（上位20）

	変動	N	%
1	要介護1→要介護1	42	20.2
2	要介護5→要介護5	42	20.2
3	要介護2→要介護2	31	14.9
4	要介護4→要介護4	27	13.0
5	要介護3→要介護3	21	10.1
6	要介護1→要介護2	11	5.3
7	要介護2→要介護3	6	2.9
8	要支援2→要支援2	4	1.9
9	要支援1→要支援1	3	1.4
10	要介護1→要介護3	3	1.4
11	要介護3→要介護4	3	1.4
12	要介護1→要支援2	2	1.0
13	要介護2→要介護1	2	1.0
14	要介護2→要介護4	2	1.0
15	要介護4→要介護5	2	1.0
16	要介護5→要介護4	2	1.0
17	要支援1→要支援2	1	0.5
18	要支援1→要介護1	1	0.5
19	要支援2→要介護1	1	0.5
20	要介護1→要介護3	1	0.5

表 5-8 モデル事業における要介護度の変動（上位 20）

	変動	N	%
1	要介護1→要支援2	4,900	18.7
2	要介護1→要介護1	4,144	15.8
3	経過的要介護→要支援1	3,450	13.2
4	要介護2→要介護2	2,295	8.8
5	要介護1→要介護2	1,478	5.6
6	要介護3→要介護3	1,460	5.6
7	要介護1→要支援1	1,151	4.4
8	経過的要介護→要介護1	1,113	4.3
9	経過的要介護→要支援2	984	3.8
10	要介護4→要介護4	944	3.6
11	要介護2→要介護3	693	2.6
12	非該当→要支援1	571	2.2
13	要介護5→要介護5	541	2.1
14	要介護4→要介護3	307	1.2
15	非該当→非該当	283	1.1
16	要介護3→要介護2	233	0.9
17	非該当→要介護1	218	0.8
18	要介護1→要介護3	213	0.8
19	要介護3→要介護4	207	0.8
20	要介護3→要介護2	191	0.7

(4) 男女別要介護度

男女別の要介護度の分布においては、在宅タイムスタディの対象となった高齢者群は、以下の表 5-9 のようになった。在宅タイムスタディの高齢者群においては、男女間の要介護について有意差は見られなかったが、モデル事業においては、有意な差がみられた。

表 5-9 男女別要介護度の記述

		N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	P 値
在宅タイムスタディ	男性	171	3	9	6.7	1.6	
	女性	295	3	9	6.7	1.6	
モデル事業	男性	8268	1	9	5.2	1.7	**
	女性	17910	1	9	4.8	1.6	

表 5-10 男女別要介護度の分布

		在宅タイムスタディ		モデル事業	
		N	%	N	%
男性	非該当	0	0.0	115	1.4
	要支援1	6	3.5	1375	16.6
	要支援2	10	5.8	1611	19.5
	要介護1	26	15.2	1786	21.6
	要介護2	34	19.9	1538	18.6
	要介護3	35	20.5	1041	12.6
	要介護4	30	17.5	561	6.8
	要介護5	30	17.5	241	2.9
	取消	0	0.0	4	0.0
	合計	171	100.0	8272	100.0
女性	非該当	0	0.0	239	1.3
	要支援1	9	3.1	3802	21.2
	要支援2	13	4.4	4489	25.1
	要介護1	58	19.7	3925	21.9
	要介護2	57	19.3	2571	14.4
	要介護3	56	19.0	1659	9.3
	要介護4	51	17.3	829	4.6
	要介護5	51	17.3	396	2.2
	取消	0	0.0	4	0.0
	合計	295	100.0	17914	100.0

(5) 年齢階層別要介護度

年齢階層別の要介護度の分布においては、在宅タイムスタディの対象となった高齢者群は、いずれの年齢階層においても要支援1、2および要介護1は少なく、比較的要介護度が高い傾向が示された。

一方、モデル事業の高齢者群では、年齢階層が高くなるほど、要介護4、5が高くなる傾向がみられた。

表 5-11 年齢階層別要介護度の分布

		在宅タイムスタディ		モデル事業	
		N	%	N	%
40～64 歳	非該当	0	0.0	11	3.1
	要支援1	0	0.0	92	1.8
	要支援2	2	9.5	219	3.6
	要介護1	3	3.6	164	2.9
	要介護2	2	2.2	185	4.5
	要介護3	5	5.5	130	4.8
	要介護4	4	4.9	65	4.7
	要介護5	10	13.3	33	5.2
	合計	26	5.7	899	3.4
65～69 歳	非該当	0	0.0	29	8.2
	要支援1	0	0.0	246	4.8
	要支援2	0	0.0	340	5.6
	要介護1	2	2.4	254	4.4
	要介護2	6	6.6	234	5.7
	要介護3	5	5.5	127	4.7
	要介護4	4	4.9	88	6.3
	要介護5	7	9.3	20	3.1
	取消	0	0.0	0	0.0
	合計	24	5.2	1,338	5.1
	70～74 歳	非該当	0	0.0	72
要支援1		1	6.7	623	12.0
要支援2		2	9.5	691	11.3
要介護1		5	6.0	536	9.4
要介護2		11	12.1	431	10.5
要介護3		10	11.0	255	9.4
要介護4		8	9.9	132	9.5
要介護5		5	6.7	72	11.3
取消		0	0.0	2	25.0
合計		42	9.2	2,814	10.7
75～79 歳		非該当	0	0.0	94
	要支援1	6	40.0	1,296	25.0
	要支援2	4	19.0	1,265	20.7

	要介護1	14	16.7	1,110	19.4
	要介護2	20	22.0	701	17.1
	要介護3	15	16.5	463	17.1
	要介護4	12	14.8	235	16.9
	要介護5	15	20.0	120	18.8
	取消	0	0.0	2	25.0
	合計	86	18.8	5,286	20.2
80～84 歳	非該当	0	0.0	100	28.2
	要支援1	2	13.3	1,644	31.8
	要支援2	8	38.1	1,728	28.3
	要介護1	20	23.8	1,578	27.6
	要介護2	20	22.0	994	24.2
	要介護3	20	22.0	630	23.3
	要介護4	15	18.5	283	20.4
	要介護5	9	12.0	110	17.3
	取消	0	0.0	2	25.0
	合計	94	20.5	7,069	27.0
85～90 歳	非該当	0	0.0	40	11.3
	要支援1	4	26.7	923	17.8
	要支援2	5	23.8	1,270	20.8
	要介護1	19	22.6	1,351	23.7
	要介護2	12	13.2	862	21.0
	要介護3	17	18.7	591	21.9
	要介護4	15	18.5	281	20.2
	要介護5	8	10.7	138	21.7
	取消	0	0.0	1	12.5
	合計	80	17.5	5,457	20.8
90 歳～	非該当	0	0.0	8	2.3
	要支援1	2	13.3	353	6.8
	要支援2	0	0.0	587	9.6
	要介護1	21	25.0	718	12.6
	要介護2	20	22.0	702	17.1
	要介護3	19	20.9	504	18.7
	要介護4	23	28.4	306	22.0
	要介護5	21	28.0	144	22.6

取消	0	0.0	1	12.5
合計	106	23.1	3,323	12.7

4. 調査項目の回答傾向

本調査では、要介護認定の調査に必要とされる 84 項目に加えて、申請者から調査参加への同意が得られた場合に、BPSD に関連する 125 項目の追加調査を行った。

まず、BPSD 関連の追加項目の回答傾向について示し、その後要介護認定に必要とされる 84 項目については、モデル事業における認定データの回答傾向との比較を行った。

なお、それぞれの項目についての回答傾向に統計的に有意な差があるかについては、Mann-Whitney の U 検定により分析した。

(1) BPSD 関連の調査項目の回答傾向

1) BPSD 関連の発現傾向

在宅のタイムスタディ調査の対象となった高齢者群について、さまざまな BPSD 関連の項目について調査を実施した。

この結果、もっとも多くの人ができないと回答した行動は、「同時に 2 つができない」271 名で 58.8%、次いで、「意思決定できない」267 名で 57.5%、「安全判断できない」240 名、51.5%で 5 割以上ができないと回答していた。

「曖昧さへの対応ができない」は 217 名、46.9%、「比喩を理解できない」が 215 名、46.8%、「損得判断できない」197 名、42.5%であり、こういった高度な判断にかかわる項目については 4 割以上が困難であると回答された。

精神的な症状として、「過剰な心配をする」197 名、42.5%や、「情緒不安定」176 名、37.90%、「自分勝手な行動」162 名、35.0%や、「悲観的な言動」153 名、33.0%、「唐突な言動・行動」150 名、32.3%、「途中で投げ出す」148 名、31.9%も多く、3 割以上の高齢者にこれらの行動がみられた。

。「昼間の閉じこもり」149 名、32.2%、「閉じこもり」146 名、31.7%、「集団参加ができない」も 132 名、28.6%と高く、閉じこもりの状態の高齢者も多いことがわかった。

「戸締りを忘れる」145 名、31.7%、「誤解して行動する」や「夜中の目覚め」の 142 名、30.7%も 3 割以上の高齢者にみられる行動であった。

「強いこだわり」132 名、28.4%、「会話にならない」130 名、28.1%、「孤独を嫌がる」128 名、27.6%、「悲観的な傾向がある」121 名、25.9%、「手順を変えられない」118 名、25.4%、「気持の切替ができない」112 名、24.1%、「独自の意思表示」108 名、23.2%、「情緒不安定」101 名、21.70%、「言葉以外の説明の理解ができない」97 名、20.9%、「人の言いなりになる」93 名、20.00%といった精神症状に係る行動も 2 割以上の高齢者にみられた。

「疑い深い」83 名、18.0%、「感覚刺激に敏感」77 名、16.6%、「意味のない独り言等」74 名、16.0%も高い割合を示しており、さらに、徘徊等を示す「一人で勝手に外出」は 68 名

で 14.7%、「多動」53 名、11.4%といった行動が示される割合も高く、在宅生活の継続に際して、介護量を多くする行動がみられた。

表 5-12 BPSD 関連項目等における「あり」の割合

項目	カテゴリ	N	%
同時に2つができない	ある	271	58.8%
意思決定できない	ある	267	57.5%
安全判断できない	ある	240	51.5%
曖昧さへの対応不可	ある	217	46.9%
比喩を理解できない	ある	215	46.8%
損得判断できない	ある	197	42.5%
過剰な心配	ある	197	42.5%
情緒不安定	ある	176	37.9%
自分勝手な行動	ある	162	35.0%
悲観的な言動	ある	153	33.0%
唐突な言動・行動	ある	150	32.3%
昼間の閉じこもり	ある	149	32.2%
途中で投げ出す	ある	148	31.9%
閉じこもり	ある	146	31.7%
戸締りを忘れる	ある	145	31.7%
誤解して行動	ある	142	30.7%
夜中の目覚め	3回以上	142	30.7%
集団参加ができない	ある	132	28.6%
強いこだわり	ある	132	28.4%
会話にならない	ある	130	28.1%
孤独を嫌がる	ある	128	27.6%
悲観的	ある	121	25.9%
手順を変えられない	ある	118	25.4%
気持の切替ができない	ある	112	24.1%
独自の意思表示	意思表示ができない	108	23.2%
不安定	ある	101	21.7%
言葉以外の説明理解	説明を理解できない	97	20.9%
人の言いなりになる	ある	93	20.0%
疑い深い	ある	83	18.0%
感覚刺激に敏感	ある	77	16.6%

意味の独り言等	ある	74	16.0%
一人で勝手に外出	ある	68	14.7%
高い自己評価	ある	66	14.3%
停止	ある	66	14.2%
知覚鈍磨	ある	64	13.8%
外出できない	ある	60	12.9%
多動	ある	53	11.4%
日常動作に要時間	ある	46	9.9%
過食等	ある	33	7.1%
無断借用	ある	32	6.9%
普段に無い声	ある	30	6.4%
気を引くトラブル	ある	29	6.3%
自殺をほのめかす	ある	28	6.0%
破壊	ある	26	5.6%
自虐	ある	7	1.5%
性的なBPSD	ある	7	1.5%
突発的行動	ある	5	1.1%
突然抱きつく	ある	3	0.6%

2) 日常生活動作関連の項目

対象となった高齢者で介助が必要と回答された割合が高かった内容は、「手の込んだ調理」455名、97.2%、「入浴の準備等」444名、94.9%、「掃除」443名、94.9%、「掃除」442名、94.4%、「調理」438名、93.8%、「交通手段の利用」435名、93.1%、「洗濯と乾燥」432名、92.5%、「洗濯」431名、92.1%、「簡単な調理」426名、91.0%、「食事の後片付けと洗浄」、「ごみすて」が425名、90.8%、「買い物」424名、90.6%、「配膳・下膳」421名、90.1%と9割以上が調理や食事、入浴の準備、掃除全般、洗濯、買い物に介助が必要であることがわかった。

また「寝具の準備等」417名、89.7%、「身の回りの整理整頓」396名、85.2%と環境整備にも8割以上が介助を必要としていた。

さらに「薬の管理」375名、80.3%、「日常の金銭管理」369名、79.4%と示され、管理に関して介助が必要であることが明らかになった。

表 5-13 日常生活動作等関連項目における「介助が必要」の割合

項目	カテゴリ	N	%
手の込んだ調理	介助が必要	455	97.2%
入浴の準備等	介助が必要	444	94.9%
掃除(整理整頓を含む)	介助が必要	443	94.9%
掃除	介助が必要	442	94.4%
調理	介助が必要	438	93.8%
交通手段の利用	介助が必要	435	93.1%
洗濯と乾燥	介助が必要	432	92.5%
洗濯	介助が必要	431	92.1%
簡単な調理	介助が必要	426	91.0%
食事の後片付けと洗浄	介助が必要	425	90.8%
ゴミ捨て	介助が必要	423	90.8%
買い物	介助が必要	424	90.6%
配膳・下膳	介助が必要	421	90.1%
寝具の準備等	介助が必要	417	89.7%
身の回りの整理整頓	介助が必要	396	85.2%
薬の管理	介助が必要	375	80.3%
情報機器	介助が必要	369	79.4%
日常の金銭管理	介助が必要	369	79.4%
家庭器具の使用	介助が必要	294	63.1%
文字の視覚的認識	介助が必要	166	35.6%

3) 社会生活等関連

対象となった高齢者で状態がもっとも悪い回答がなされた割合が高かった内容は、「一人での外出」であり、できないと回答したのは 404 名、86.9%と最も多かった。続いて、「洗髪」に介助が必要としたのは、403 名、86.5%であった。

また、睡眠障害に関連する「昼寝」について、「あり」としたのは 387 名、83.6%であった。「職の持続」ができないのは 377 名、82.7%、「指示された日時の通院」に介助が必要としたのは、384 名、82.4%、「髭剃り」に介助が必要としたのは、329 名、81.6%、「バランスの取れた食事」をするために、介助が必要なのは、376 名、80.7%であった。以上の項目について 8 割上の高齢者ができない、BPSDあり、もしくは介助が必要とされた。

7割以上見られた項目としては、「友人(居宅への訪問者)」がないとしたのが 342 名、78.6%、「日常生活で課題遂行の準備」に介助が必要なのが 359 名、77.9%、「貴重品管理」に介助が必要なのは 349 名、75.1%、「郵便物や宅配便の処理」ができないと回答したのは、331 名、

71.0%であった。

これらの結果からは、在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群は、外出は一人では困難であることや、訪問者が少ないことが示されていた。昼寝の割合が高いことも特徴である。

清潔の維持としての「洗髪」や「髭剃り」にも介助が必要であると8割以上回答され、「季節や状況にあった衣服を選ぶ」ことができないとの回答が56.4%と示され、社会的な生活を営むことに困難が生じている状況が示されていた。

さらに、「たんの吸引」7.4%、「インスリンの注射」4.6%といった医療的なケアが必要な高齢者や「てんかん発作がある」ような対象者も2.6%と示されていた。

表 5-14 社会生活等関連項目における状態が悪い項目の回答割合

項目	カテゴリ	N	%
一人での外出	できない	404	86.9%
洗髪	介助が必要	403	86.5%
昼寝	あり	387	83.6%
職の持続	できない	377	82.7%
指示された日時の通院	介助が必要	384	82.4%
髭剃り	介助が必要	329	81.6%
バランスの取れた食事	介助が必要	376	80.7%
友人(居宅への訪問者)	ない	342	78.6%
日常生活で課題遂行の準備	介助が必要	359	77.9%
貴重品管理	介助が必要	349	75.1%
郵便物や宅配便の処理	できない	331	71.0%
日常生活で課題に合わせて自分で決める	介助が必要	314	68.3%
毎日の移動範囲	居宅内	315	67.7%
余暇時間を楽しむ	介助が必要	307	66.0%
選挙での投票	できない	297	64.3%
近隣の住民(居宅への訪問者)	ない	268	62.2%
独力のストレス解消	介助が必要	282	60.5%
福祉施設職員(居宅への訪問者)	ない	247	58.0%
季節や状況にあった衣服選択	できない	263	56.4%
医療関係者(居宅への訪問者)	ない	237	54.6%
交友関係の維持	できない	252	54.2%
1年前の状態との比較	悪くなっている	224	48.1%
非同居の家族(居宅への訪問者)	ない	158	35.9%

今の時間を理解	できない	161	34.5%
作業場面で課題遂行の準備	介助が必要	147	32.5%
助けを求める	できない	146	31.3%
文字の読み書き	できない	142	30.5%
作業場面で課題に合わせて自決	介助が必要	125	27.6%
何もしていない(日中活動)	あり	119	25.5%
11 以上の数を数える	できない	118	25.3%
外出しない(外出の理由)	あり	83	17.8%
福祉サービス職員(居宅への訪問者)	ない	79	17.6%
寝つき	悪い	73	15.7%
補装具	つけている	56	12.0%
たんの吸引	過去 14 日間に行われた	34	7.4%
単身生活(現在の状況)	あり	23	4.9%
インスリンの注射	過去 14 日間に行われた	21	4.6%
片方の手を胸元へ	できない	16	3.4%
てんかん発作	ある	12	2.6%

(2) 要介護認定に必要な 84 項目の回答傾向 (モデル事業との比較)

1) 麻痺・関節制限等関連

在宅タイムスタディ調査対象群とモデル事業調査対象群の両群の比較をした結果、麻痺については、「あり」と回答した割合が、「左上肢」、「右上肢」については、在宅タイムスタディの群の方が高かったが、「左下肢」、「右下肢」、「その他」については、モデル事業の方が高かった。モデル事業の対象となった高齢者は、下肢に障害が多く示され、在宅タイムスタディ調査の対象においては、上肢の障害が多かった。これらの差異に関しては、それぞれの項目について、統計的に有意であった。

関節の制限については、「肩関節」、「肘関節」、「股関節」、「膝関節」、「足関節」、「その他」、いずれも「あり」と回答した割合が在宅タイムスタディの群の方が統計的に有意に高かった。

表 5-15 麻痺および関節制限等関連項目の回答傾向

	在宅タイムスタディ		モデル事業		P値	
	N	%	N	%		
左上肢	1 なし	330	70.4%	23,599	90.1%	**
	2 あり	139	29.6%	2,579	9.9%	
右上肢	1 なし	330	70.4%	23,634	90.3%	**
	2 あり	139	29.6%	2,544	9.7%	
左下肢	1 なし	142	30.3%	5,669	21.7%	**
	2 あり	327	69.7%	20,509	78.3%	
右下肢	1 なし	153	32.6%	5,664	21.6%	**
	2 あり	316	67.4%	20,514	78.4%	
その他	1 なし	388	82.7%	19,746	75.4%	**
	2 あり	81	17.3%	6,432	24.6%	
肩関節	1 なし	295	64.4%	20,562	78.5%	**
	2 あり	163	35.6%	5,616	21.5%	
肘関節	1 なし	365	79.7%	24,606	94.0%	**
	2 あり	93	20.3%	1,572	6.0%	
股関節	1 なし	351	76.6%	23,654	90.4%	**
	2 あり	107	23.4%	2,524	9.6%	
膝関節	1 なし	250	54.6%	16,272	62.2%	**
	2 あり	208	45.4%	9,906	37.8%	
足関節	1 なし	355	77.5%	24,166	92.3%	**
	2 あり	103	22.5%	2,012	7.7%	
その他	1 なし	363	79.3%	22,931	87.6%	**
	2 あり	95	20.7%	3,247	12.4%	

**P<0.01 *P<0.05

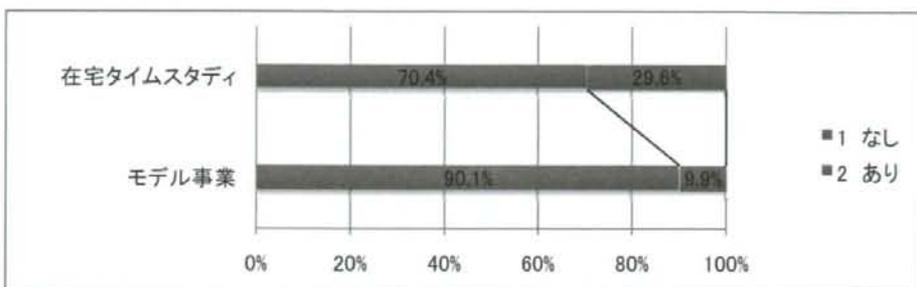


図 5-2 麻痺_左上肢

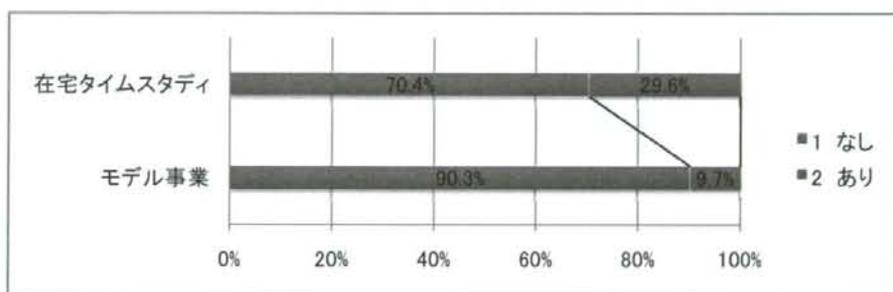


図 5-3 麻痺_右上肢

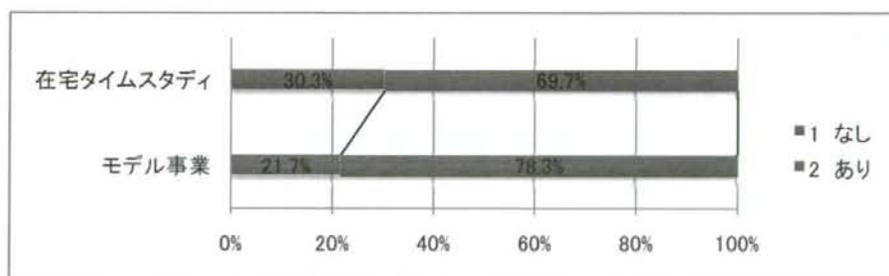


図 5-4 麻痺_左下肢

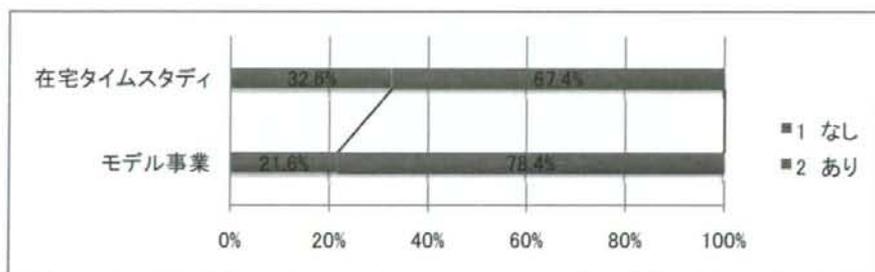


図 5-5 麻痺_右下肢

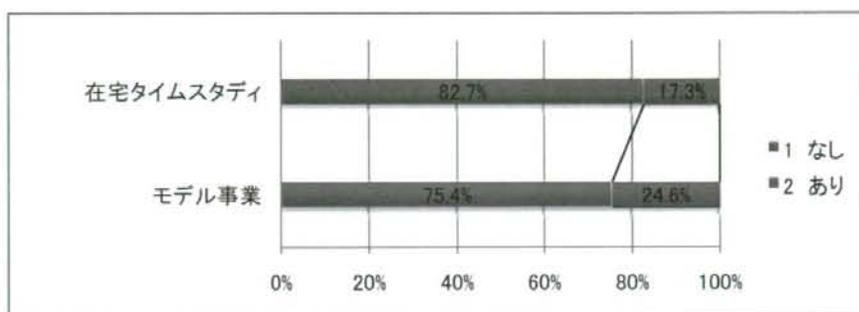


図 5-6 麻痺_その他

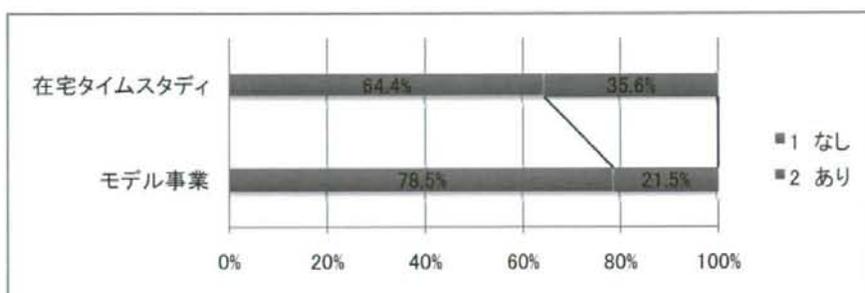


図 5-7 関節制限_肩関節

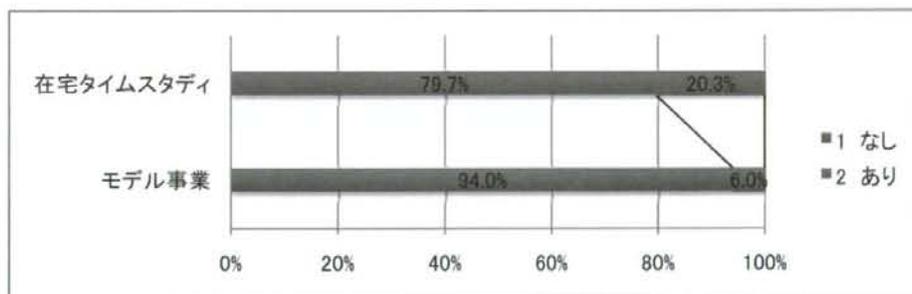


図 5-8 関節制限_肘関節

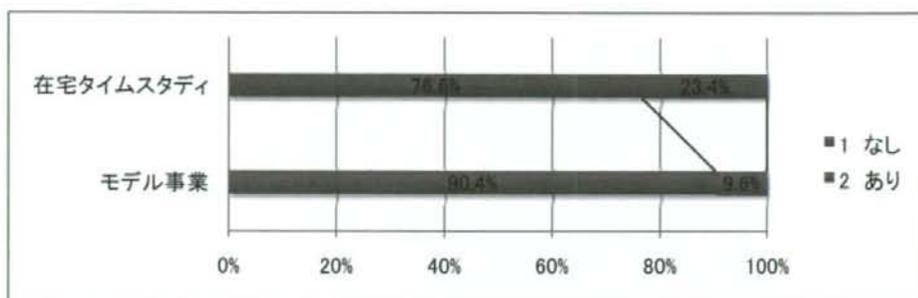


図 5-9 関節制限_股関節

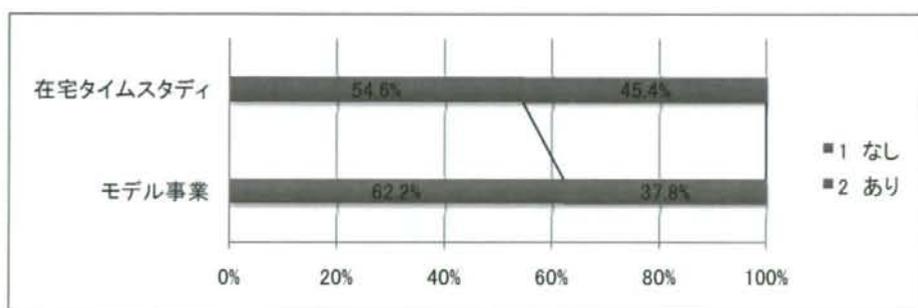


図 5-10 関節制限_膝関節

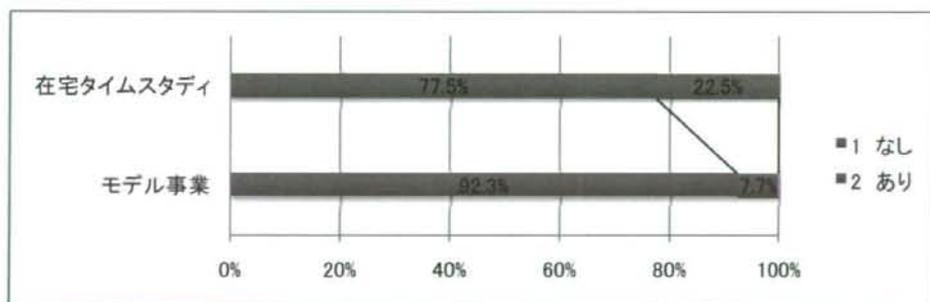


図 5-11 関節制限_足関節

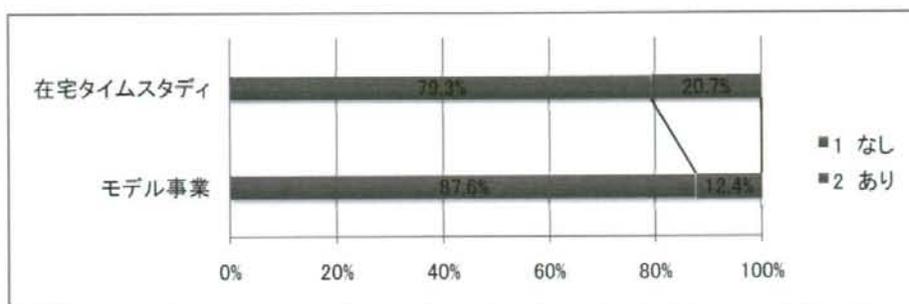


図 5-12 関節制限_その他

2) 移動等関連

在宅タイムスタディ調査対象群とモデル事業調査対象群の両群の比較をした結果、在宅タイムスタディ調査対象群は、「できない」と回答した割合が、「寝返り」19.6%、「起き上がり」28.7%、「座位保持」7.9%、「両足立位保持」21.5%、「歩行」29.9%となっていた。また「移乗」21.7%、「移動」25.5%は「全介助」を示していた。

この結果からは、本調査の在宅タイムスタディ調査の対象となった高齢者群がモデル事業の調査対象群よりも有意に移動についての能力が低いことを示していた、とくに「歩行」は29.9%が、「起き上がり」についても28.7%が「できない」と回答しており、移動の自立度は、かなり低い群であることが示された。

表 5-16 移動等関連項目の回答傾向

		在宅タイムスタディ		モデル事業		P値
		N	%	N	%	
寝返り	1 つかまらないでできる	145	30.9%	12,038	46.0%	**
	2 何かにつかまればできる	233	49.6%	12,968	49.5%	
	3 できない	92	19.6%	1,172	4.5%	
起き上がり	1 つかまらないでできる	64	13.6%	3,138	12.0%	**
	2 何かにつかまればできる	272	57.7%	20,774	79.4%	
	3 できない	135	28.7%	2,266	8.7%	
座位保持	1 できる	188	40.0%	12,644	48.3%	**
	2 自分の手で支えればできる	127	27.0%	9,014	34.4%	
	3 支えてもらえばできる	118	25.1%	4,275	16.3%	
	4 できない	37	7.9%	245	0.9%	
両足立位保持	1 支えなしでできる	153	32.6%	14,747	56.3%	**
	2 何か支えがあればできる	216	46.0%	9,834	37.6%	
	3 できない	101	21.5%	1,597	6.1%	
歩行	1 つかまらないでできる	93	19.7%	8,385	32.0%	**
	2 何かにつかまればできる	237	50.3%	15,150	57.9%	
	3 できない	141	29.9%	2,643	10.1%	
移乗	1 できる	149	31.6%	19,836	75.8%	**
	2 見守り等	114	24.2%	3,441	13.1%	
	3 一部介助	106	22.5%	1,829	7.0%	
	4 全介助	102	21.7%	1,072	4.1%	
移動	1 できる	115	24.5%	17,866	68.2%	**
	2 見守り等	122	26.0%	4,656	17.8%	
	3 一部介助	113	24.0%	2,078	7.9%	
	4 全介助	120	25.5%	1,578	6.0%	

**P<0.01 *P<0.05